

古典作品を題材にして、書く能力を伸ばす 「国語表現Ⅰ」指導法の研究

— 「書き換え」学習活動を柱にした授業づくり —

黒川 裕樹¹

「国語表現Ⅰ」では現代文分野の題材を扱うことが多いが、本研究では、古典の中でも特に生徒の想像力を喚起できる作品を題材にして、書く能力を伸ばすことをテーマにしている。このことを検証するために「書き換え」学習の手法を取り入れた。教科書掲載の著名な古典作品をもとにした「書き換え」学習の活動を行ったところ、生徒は想像力を働かせて、多彩に場面や人物描写をすることができ、書く能力の向上が見られた。

はじめに

平成20年1月の「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」中央教育審議会答申（2008）によると新しい学習指導要領への改訂にあたり「表現力の育成」が重視された。このことは、現行の「国語表現Ⅰ」と「国語表現Ⅱ」を再構成した「国語表現」の「適切に話したり書いたりする力など、実社会で活用することのできる表現の能力を確実に育成する」という改善の具体的事項に反映されている。

また、この答申の「7. 教育内容に関する主な改善事項」に「伝統や文化に関する教育の充実」とあり、国語科では古典重視が明示された。さらに古典は「8. 各教科・科目等の内容」において「話すこと・聞くこと・書くこと及び読むことの言語活動」を通しての指導が求められている。そこで本研究は、今日的課題である「表現力の育成」の重視をベースに、もう一つの課題である古典重視も踏まえ、古典作品を題材にして表現力を伸ばす国語表現の指導法について探究した。

研究の内容

1 テーマ設定の理由

平成17年度高等学校教育課程実施状況調査において、文章を書くことに対して課題があることが指摘されている。同質問紙調査によると、自分の思いや考えを文章に書くことが好きと答えた生徒は全体の17.4%に過ぎず、否定的な回答をした生徒は全体の56.6%と半数以上にのぼった。

実際の授業においても、400字詰め原稿用紙を配付されただけで、何も書き出せない生徒がいる。所属校で「国語表現Ⅰ」選択者（5クラス）全42人を対象にア

ンケートを実施したところ、「文章で表現すること」に対し、「あまり好きではない」「嫌い」と答えた生徒は合わせて30人（71%）になり、所属校でも「書くこと」に対して、苦手意識を持っている生徒が多いことが明らかになった。自由記述形式でその理由を聞いたところ「考えるのが苦手」「面倒」「発想力がない」「何を書けば良いのか分からない」など、書く内容を想像するという「書くこと」の基礎段階に課題があることが確認できた。このことは、授業の中で生徒の想像力が十分に引き出されていないことが一因として考えられる。

このような状況において、求められているのは、生徒の想像力をうまく引き出し、書く能力を伸ばす「国語表現Ⅰ」の授業づくりであると考えた。ここに中央教育審議会答申（2008）に盛り込まれた「伝統的な言語文化」の「書くこと」領域からの関連指導の重要性も踏まえ、古典作品を題材にして、書く能力を伸ばす「国語表現Ⅰ」指導法の研究というテーマを設定した。

2 書く能力について

現行の学習指導要領「国語表現Ⅰ」「2内容」のうち、「書くこと」に関するのは次の3事項である。

- ・情報を収集、整理し、正確かつ簡潔に伝える文章にまとめること。
- ・目的や場に応じて、言葉遣いや文体など表現を工夫して話したり書いたりすること。
- ・様々な表現についてその効果を吟味し、自分の表現や推敲に役立てること。

しかし、全国的な調査結果でも、所属校のアンケート結果においても、生徒の「書くこと」に対する苦手意識は根強いものがあり、これらの事項を習得させるためには、さまざまな手だてが必要である。また所属校においては「書くこと」領域を支える知識としての語彙力が、不足しがちであることにも留意しなければならない。

文化審議会答申（2004）によれば、論理的思考力・表現力を伸ばすために、三つの発達段階に応じた指導

1 神奈川県立津久井高等学校
研究分野（国語）

が必要であるとしている。

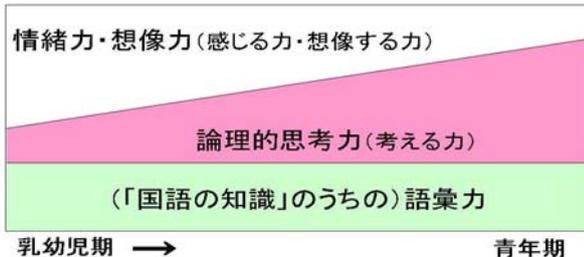
(1) 3歳までの乳幼児期【コミュニケーション重視期】

(2) 3～11・12歳（小学校高学年くらい）まで

【基礎作り期】

(3) 13歳（中学生）以上 【発展期】

また【基礎作り期】には、情緒力や想像力に重点を置き、【発展期】には、論理的な思考力の育成に努めることが重要であるとしている（第1図）。



第1図 発達段階に応じた「国語教育における重点の置き方」のイメージ図

さらに「表現力」は、「『情緒力・想像力』『論理的思考力』『語彙力』のすべてに関連する」とある。そこで、「書くこと」に対して苦手意識を持っている生徒に対しては、「情緒力・想像力」に重点を置く指導が有効であり、このことによって「国語表現Ⅰ」の目標の「国語で適切に表現する能力を育成」することにもつなげられると考えた。

3 研究の仮説

(1) 「書き換え」学習

「情緒力・想像力」をはぐくむ具体的な指導方法の一つとして、「書き換え」学習がある。この学習を府川は、「一度書かれた文章を別の文体や別の立場からもう一度『書き換え』る学習活動をする事」（府川・高木 2004 p. 129）と定義している。そして、「書き換え」対象となる完成度の高い文章を、「崩したり、膨らませたりするには、改変する側にある程度の『力』が必要になる」とした上で、「着想力、発想力、また連想力などの思考力を総動員して、その作業に当たらなければならない」学習活動であると位置付けている（p. 132）。

(2) 古典作品の題材

本研究では、この「書き換え」学習を実践するだけでなく、中央教育審議会答申（2008）の「伝統的な言語文化」の重視を踏まえ、「国語表現Ⅰ」の授業では実践例が少ない古典作品を題材に扱うことにした。古典作品を題材にした「書き換え」学習は、事例そのものが少なく、その目的もテキストの読解をより深めるための実践が中心である。確かに古典作品は、単に現代の言葉と違うだけでなく時代背景や習慣も異なり、一読しただけでは話の筋をつかみにくい側面もある。そのため、古典作品を扱う授業では、内容の理解を一義として、「読むこと」に軸足が置かれてきた。

しかし、書く能力を伸ばすために「情緒力・想像力」に重点を置く本研究の場合には、逆に古典作品を題材にすることが有効であると考えられる。なぜなら、直接見ることができずに想像するしかないという古典作品の特性を、最大限に生かすことができるからである。着想や発想などを広げながら、その人物の視点でイメージをふくらませる「書き換え」学習の題材として、向いているのではないかと判断している。

本研究では、より効果的な「書き換え」学習の活動をさせるために、古典の中でも特に生徒の想像力を喚起できる作品を題材にして、書く能力を伸ばす指導法を模索しようと考えている。そこで次の研究仮説を立てた。

古典の中でも特に生徒の想像力を喚起できる作品を題材にした「書き換え」学習活動をすることで、書く能力が伸びるであろう。

4 検証授業

(1) 検証授業の概要

平成20年10月に神奈川県立津久井高等学校第3学年「国語表現Ⅰ」（選択）の担当クラス13人を対象に、単元名を「書き換え」学習による創作活動として、6時間扱いで仮説を検証する授業を行った（第1表）。

ア 授業の組み立て

検証授業は、古典作品を題材にした二つの「書き換え」学習活動を柱にしている（第2図）。

一次（1・2時）は、『徒然草』第八十九段『猫また』の途中の話までを、ワークシートを使って把握させ、自由に想像して続きを書くという内容である。

二次（3～5時）では、話の結末を確認した後、話中に登場する連歌法師や「猫また」へのインタビュー記事を書く活動をさせた。作品に臨場感を出すために、話し言葉を使わせるとともに、連歌法師や「猫また」の性格を考えさせて、インタビュー記事を書かせた。このように「書き換え」学習活動は、学習指導要領「国語表現Ⅰ」「2内容」のうち、「目的や場に応じて、言葉遣いや文体など表現を工夫して話したり書いたりすること」と合致している活動である。そして、作品が完成したという

達成感も味わわせるために、活動の延長として新聞にまとめさせた。

三次（6時）では、完成したこの新聞を付せんの活用により相互評価し、最後に単元全体の感想を書かせた。

一 次 「書き換え」 学習1	1時	ワークシート・現代語訳による 内容把握をする
	2時	
二 次 「書き換え」 学習2	3時	『猫また』の続きを書く
	4時	
	5時	
三 次 まとめ	6時	新聞記事にまとめる
		新聞記事を相互評価する

第2図 授業の組み立て

第1表 単元の指導と評価の計画

時次	ねらい	学習内容	評価の観点	
一次	1時	<ul style="list-style-type: none"> 教材のあらすじを、ワークシートを使ってとらえさせ、内容を把握させる。 ワークシートなどの手段を通して「猫また」へのイメージをとらえさせる。(『徒然草』原文と現代語訳) 	<ul style="list-style-type: none"> 『徒然草』第八十九段『猫また』の途中までのあらすじを、ワークシートを通して5W1H形式で整理し、確認する。 噂話をまとめたり、挿絵を見たりすることで「猫また」へのイメージをふくらます。 	知識・理解 関心・意欲・態度
	2時	<ul style="list-style-type: none"> 創作はもとの話を踏まえながら、展開や結末を工夫することが大切であることを理解させる。(「書き換え」学習1) 	<ul style="list-style-type: none"> PCのワープロソフトを使って『徒然草』第八十九段『猫また』の話の続きを、展開や結末を工夫しながら書く。 	知識・理解 関心・意欲・態度
二次	3時	<ul style="list-style-type: none"> 聴覚的・視覚的な手段を通して、『猫また』の結末が「飼ひける犬」であることを確認させる。 インタビュー記事の基本的な形式と、それにふさわしい言葉遣いを理解させる。 生き生きとしたインタビューにするために、記者による質問の切り口を工夫することを意識させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 全文朗読CDを聞き、『絵本徒然草』などの挿絵を通して、結末が「飼ひける犬」であることに気付く。 モデル文を朗読して、インタビューの基本的な形式を学ぶとともに、話し言葉が使われていることを理解する。 質問項目だけ提示されたインタビューのひな形をもとに、連歌法師に対してどのような質問をするのかを考える。 	知識・理解 関心・意欲・態度
	4時	<ul style="list-style-type: none"> 生き生きとしたインタビューにするためには、回答する人物の反応も大切であることを意識させる。 インタビュー記事の創作を通して、人物像や心情を想像し、一つの出来事であっても、立場が異なれば、違うものの見方ができることを考えさせる。(「書き換え」学習2) 	<ul style="list-style-type: none"> インタビューのひな形の具体的な質問文をもとにして「猫また」の回答を考える。 インタビューの内容を分かりやすく構成し、連歌法師や「猫また」などの人物像や心情を考えながら展開を工夫するとともに、最後に記者(生徒)によるまとめの言葉を入れてインタビュー記事を書く。 	知識・理解 関心・意欲・態度
	5時	<ul style="list-style-type: none"> 創作したインタビュー記事を踏まえて、新聞記事を製作させることにより、達成感を味わわせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 創作作品をワープロソフトの指定した書式に貼り付け、それをもとにして新聞記事を製作し、推敲する。 	知識・理解 関心・意欲・態度
三次	6時	<ul style="list-style-type: none"> 新聞記事の相互評価を通して、作品の振り返りをさせることにより、自分の表現や推敲に役立たせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 印刷された他者の新聞記事を読み、感想を付せんに書いて貼る。それをもとに自分の作品の特徴を整理して、振り返り文を書く。 	知識・理解 関心・意欲・態度

イ 教材『徒然草』第八十九段『猫また』について

『徒然草』は、わが国を代表する随筆文学である。第八十九段『猫また』は文章が短くまとまっており、比較的簡単な構成で書かれている。この話は、「猫また」の噂に怯えた連歌法師が、深夜帰宅した時に「飼ひける犬」に飛びつかれたのを「猫また」だと勘違いして大騒ぎするという親しみやすい話である。また、会話文も多いため、その生き生きとした描写を作品づくりに反映させるという効果も期待できる。このように「猫また」に慌てる連歌法師などの心情を想像して物語を創作させるには、最適の題材であると言える。

『猫また』の主題を、安良岡(1967)は「失敗譚であり、滑稽な事件である」とし、結末が示された瞬間に「連歌師に対する同情・憐憫は、急速に軽蔑・冷視に変わってしまう」という見方を提示している(p.383)。また、神田・永積・安良岡(1971)は「作者のえせ出家に対する嫌悪と批判とが、いかに痛烈であったかを示すものである」と述べている(p.164)。ただし今回は、あくまでも書く能力を伸ばすための題材として『猫

また』を扱ったため、詳細な理解をさせることは本研究の趣旨ではない。そこで、事件に対する作者のこの見方を踏まえつつも、主題を外さずに「書き換え」学習に必要な情報を把握させることに留意した。

(2) 指導法の工夫と生徒の様子

ア ICTの活用

所属校では原稿用紙の前に何も書けなくなる生徒が多い。そこでPCのワープロソフトを使わせることで、「書くこと」への抵抗感を取り除き、



第3図 ICTの活用

書く量を増やすようにした。量を多く書くことが、深く思考するための第一歩

になると思われるからである。また、生徒席2人に1台設置されているモニターを活用して指示内容の徹底を図った(第3図)。ICTの活用は資料の提示を容易にする効果もあり、『絵本徒然草』などの挿絵をモニターに映して話の結末を確認させる時などに役立った。

イ 一次におけるワークシートの活用

一次の「書き換え」学習は、『徒然草』の『猫また』の話の途中までを提示して、その続きを書くという活動である。その際、本文の内容や古典作品の世界を踏まえて、展開や結末を書くことが望ましいことを指導した。話の流れに必然性のない筋書きは、論理的思考力を伸ばすことにはつながらないと考えたからである。

そこで、本文の内容を把握させるために、ワークシートを活用して、穴埋め問題形式で連歌法師の名前や住んでいる場所などを、現代語訳から抜き出させた。そして、「いつ」「どこで」「誰が」「どうなった」のかを5W1H形式で正確かつ簡潔にまとめさせた。ワークシートによって確認したのは、第八十九段の連歌法師が「猫また(実は「飼ひける犬」)」に飛びつかれて腰を抜かす部分までである。このあとの展開や結末の想像を工夫させることが、創作のポイントである。

ウ 二次における原文朗読CDとひな形の活用

二次では、第八十九段『猫また』全文の内容を踏まえて、連歌法師や「猫また」へのインタビュー記事を書かせる活動を行った。生徒たちには前述の通り、この章段の主題が、連歌法師への「同情」ではなく「軽蔑」であることを押さえさせることが重要である。

その指導法として、ワークシートのほかに原文朗読CDを活用することにした。これは原文の持つ独特のリズムに親しませるだけでなく、読み方の緩急や声の大きさの変化を通して、より効果的に内容を把握させることが期待できる。特に結末の「飼ひける犬の、暗けれど主と知りて、飛びつきたりけるとぞ。」の読み方は、連歌法師への「軽蔑」がそのまま伝わってくる迫力を持っている。この活動を通して、生徒全員が結末の内容を確認することができた。

次に連歌法師の記事を創作させるために、モデル文を使ってインタビューの基本的な形式を理解させ、5W1H形式の質問文のひな形を提示して指導を行った。ここでは、襲われた連歌法師の視点でこの「事件」を振り返ることが必要になってくる。

「猫また」のインタビュー記事では、生徒への負担を減らすために、「今回の何阿弥陀仏の事件について、ご感想を一言お願いいたします」「これからどのようにお過ごしになるつもりですか」など、インタビューのひな形に具体的な質問文を載せておき、「猫また」の答える内容のみを生徒に考えさせた。

連歌法師と「猫また」とともに人物像や心情を想像しながら、展開を工夫させることが重要である。また記事を総括するため、記者（生徒）によるまとめの言葉を入れさせることも指導のポイントとした。

エ 新聞記事へのまとめ

創作したインタビュー記事を、目に見える形に仕上げるにより、生徒に達成感を味わわせたいと考え、ここではインタビュー記事の作品にふさわしく、新聞形式にまとめることにした。まず、拡大印刷した見本を生徒に提示してイメージをわかせるとともに、実際の新聞のインタビュー記事をモニターに映して、参考にさせた。そして生徒に、ワープロソフトで段組にした書式に合わせて、自分の作品を編集する作業を行わせた。結果、生徒の振り返り文の中に「なんとなく自分が記者になれたような感じがした」「図を入れたりレイアウトを変えたりするのが楽しかった」「終わってみると自分でインタビューした記事が新聞になっていて、ちょっと感動しました」という言葉があった。これは、イラスト（使用許諾済）により、見栄えをよくするとともに、紙面のタイトルや見出しを考えさせたことも、達成感を味わわせるといった目的のために有効であったことを示している（第4図）。



第4図 完成した新聞記事（生徒作品）

(3) 検証授業の結果

書く能力を伸ばせたかどうかの検証方法として、生徒作品の一部を紹介し、「文字数」（二次では「構成」）、「展開」、「結末」の観点から生徒作品の変容を追うと

ともに、検証授業後のアンケート結果から、今回の指導法の効果を考察する。

ア 『猫また』の続きの生徒作品から

- ・「ここで倒れたら好きな連歌を続けられなくなる」その一心で「猫また」を撃退し、法師はそれを己の武勇伝とした。現場で殺された犬を前に人々が騒ぐ中、法師は一人何も知らずに、ただ幸せに過ごしている。
- ・「猫また」は、死んだ猫の霊が別の猫に取り憑いたものである。「猫また」をおびき寄せて、法師が経を唱えてお札を投げると、霊は離れていった。
- ・法師は、手元にあるキャットフードを与えて「猫また」の難を逃れた。再び法師の前に現れた「猫また」が甘えた声を出す。心を開いた瞬間であった。
- ・「猫また」と戦う一匹の猫のおかげで法師は助かる。その猫は、法師が以前助けた猫であった。

これらの生徒作品には、連歌法師をはじめ、「猫また」や猫に対しても、想像力を働かせて人物描写が行われている。登場人物の描き方によって、続きの展開が変わることを踏まえると、この登場人物像を考えさせる作業が、描写する力、ひいては書く能力につながっていくのだと考える。

イ 連歌法師、「猫また」へのインタビュー記事から

- ・連歌の会の帰りでな。少し頑張りすぎて遅うなってしまったのじゃ。だがな、沢山掛物が取れたのじゃぞ。扇に小箱、それにな…。あの事件のことはできれば…あまり他の者に話をしないで欲しいのお。
- ・夜遅くまで賭け…いや、違った。…連歌をしててな。周りの人は…お見舞いに来てくれない。「自業自得」って言う者がいるが、私が何をしたというんだ。
- ・なぜ俺たちが年老いた人間の首をかむ必要がある？人間どもが勝手に作った噂だろう。
- ・確かこれ、新聞に載せるインタビューだよな。この記事を読めば猫または悪くないことが証明される。

今回のインタビュー記事の創作では、直接話を聞いているような臨場感を出すように指導した。生徒作品を見る限り、話し言葉を使って連歌法師や「猫また」の性格を表現することに成功したと考えられる。欠席1人を除く12人のインタビュー記事の記述から、生徒が連歌法師の今回の騒動の原因をどのようにとらえているかを分析してみると、以下の結果となった。

- ・噂に怯えていたから … 2人
- ・夜中に一人歩きをしていたから … 4人
- ・連歌に夢中になりすぎたから … 4人
- ・「猫また」の正体に気付かなかったから … 2人

「連歌」に触れた生徒作品の中には賭け事に対する批判的態度が含まれているものもあった。作者・吉田兼好の連歌法師に対する「軽蔑」を生徒なりに受け止めて創作に生かすことができた事例は、「書くこと」だけではなく、「書き換え」学習の「読むこと」領域への効果を改めて確認できたものと言える。

ウ 新聞記事の相互評価から

- ・5W1Hがきちんとできている。
- ・本当のインタビューみたいに会話になっていて良かった。法師のユニークな人柄が伝わってきた。
- ・本物の新聞のような臨場感のある書き方が良い。

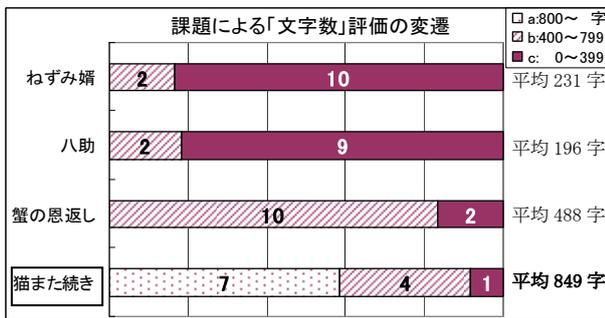
「5W1H」「会話」「人柄」「臨場感」など、指導した内容に触れて相互評価をしている。この記述から書く能力を高める要素を生徒なりに受け止めて、学習活動に生かそうとする姿勢が伝わってくる。

生徒の振り返り文の中に「感想をもらうことで改めて自分の文章を見直すことができたり、他の人の作品をじっくり読むことができたりしてよかった」という言葉があった。このように作品への理解を生徒間で共有することで、更に学習効果が高まるものと考えられる。

エ 「文字数」「展開」「結末」評価の変遷から

検証授業を行ったクラスは、1学期において古典作品を題材にした「書き換え」学習を3回実施している。題材は、『ねずみの婿取り』（『沙石集』古活字本巻八）、『たこ売りの八助』（『世間胸算用』巻四奈良の庭籠）、『蟹の恩返し』（『今昔物語集』巻十六第十六話）である。これらは現代語訳を生徒に提示しただけで、本文の内容を把握させる指導を行わずに、続きを書かせる「書き換え」学習を行った。これに検証授業で扱った「猫また続き」（『徒然草』）を加えて、「文字数」の変遷を整理したのが第5図である。

藤井（1993）は、「文字量や語い数の多少は、文章表現の基礎的な能力と無関係ではない（p. 256）」と述べている。ここでは原稿用紙1～2枚分は書いて欲しいという視点から400～799字を「b」とし、800字以上は「a」、400字未満は「c」と評価した。1学期に実施した三つの題材の平均文字数は308字であり800字以上書くことができた生徒はいなかった。「猫また続き」では、平均文字数849字に増え、800字以上書くことができた生徒は7人となった。

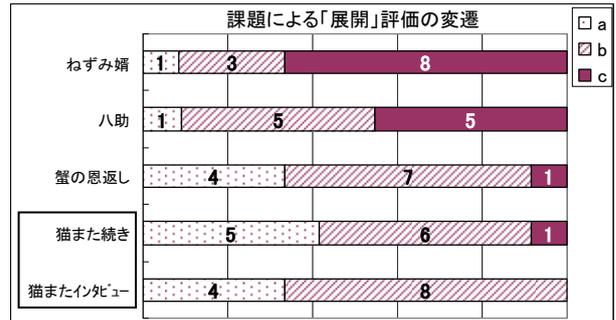


第5図 「文字数」の評価分布 (n=11~12)

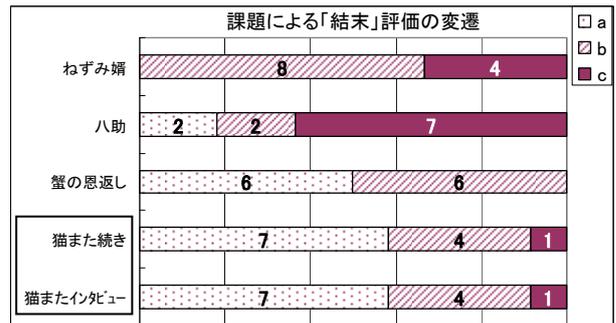
作品の「展開」「結末」の工夫により、話の流れや内容の良し悪しが決まる。そこで、この単位では「展開」「結末」を重視して、それぞれ「a」「b」「c」の3段階で評価した。（「a」…展開や結末を十分工夫して多彩に場面や人物描写をしている 「b」…展開や結

末を工夫して場面や人物描写をしている 「c」…展開や結末に工夫が見られず場面や人物描写も乏しい）

古典を題材にした五つの「書き換え」学習活動の生徒作品の「展開」と「結末」を、同じ規準で評価して、比較したのが第6図と第7図である。1学期に実施した『ねずみの婿取り』などと比較すると『猫また』の「展開」評価の「a」「b」が増えていることが分かる。また「結末」の「a」の伸びも顕著である。以上の「展開」「結末」に「文字数」を加えた三つの要素を総合的に判断して、この単元の書く能力を評価したが、予想どおり書く能力の向上が見られた。



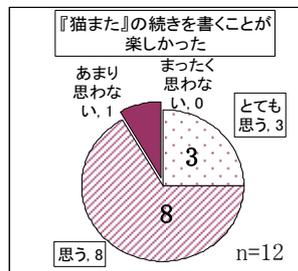
第6図 「展開」の評価分布 (n=11~12)



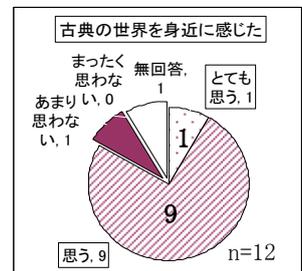
第7図 「結末」の評価分布 (n=11~12)

オ 事後アンケート（10月27日）から

事後アンケートにより、生徒の意識を明らかにして、今回の指導法の効果を考察する。

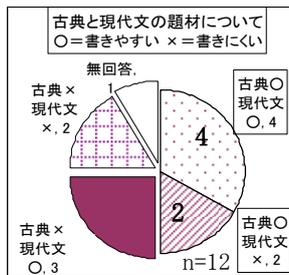


第8図 事後アンケート1

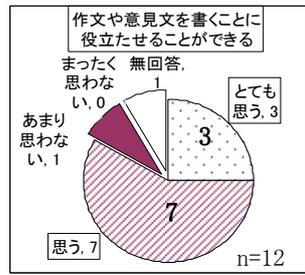


第9図 事後アンケート2

第8図「『猫また』の続きを書くことが楽しかった」という生徒は12人中11人、第9図「古典の世界を身近に感じた」という生徒は12人中10人となった。このことから、生徒は楽しみながら創作を行っており、さらに古典を身近に感じる事ができたようである。



第10図 事後アンケート3



第11図 事後アンケート4

第10図「古典と現代文の題材について」書きやすさを聞いたところ、現代文では12人中7人、古典では12人中6人が書きやすいと答えた。そして題材が現代文、古典どちらであっても書きにくいという生徒は2人にとどまった。「国語表現Ⅰ」では現代文の題材を扱うことが多いが、古典作品でも十分に授業の題材となり得ることが分かった。

第11図では、話の続きやインタビュー記事を書くこの経験を「作文や意見文を書くことに役立たせることができるかどうか」を聞いたものである。「とても思う」「思う」と答えた生徒は12人中10人となった。文章を「書くこと」に苦手意識を持つ生徒が、肯定的な回答をしたこの姿勢を大切にしたいと考えている。それは、高校生の段階で本来行うべき「論理的思考力」に重点を置いた指導につながられるからである。

5 研究のまとめ

本研究では、古典作品を題材にした「書き換え」学習によって、生徒の書く能力を伸ばせたかどうかを検証した。生徒の想像力をはぐくむことに重点を置き、一つの作品として完成させることができたという意味では、成果があったと言えよう。実際に古典作品の内容を把握させた上で、話の続きやインタビュー記事を書くという活動を展開したところ、生徒作品の文字数が増加するとともに、展開や結末にも工夫が見られるようになった。また的確に場面描写をしたり、登場人物像を想像して会話文を工夫することで、その性格を表現したりすることにも成功している。このことから、古典作品（『徒然草』の『猫また』）の内容を把握させる手順を踏んだ上で、それを題材にした「書き換え」学習活動を行うことは、生徒の書く能力を伸ばす指導法として有効であると確認できた。さらにアンケート結果によって、生徒が楽しみながら活動したことや、古典を身近に感じたことが伝わってきた。

一口に古典作品と言っても、物語、随筆、日記、和歌、俳諧、そして漢文と多岐に渡っており、どの分野の作品が「書き換え」学習に適しているのかについては、十分体系化されているとは言い難い。また「書き換え」学習そのものについても、続きやインタビュー記事を書くこと、和歌を散文に直すこと、登場人物の視点を変えて書き直すこと、というように多様な活動

が存在する。生徒の実態に合わせて、題材や活動内容を考えていく必要がある。

おわりに

書く能力は、簡単に身に付くものではない。想像力を喚起できる適切な題材を使い、創造力をはぐくむような効果的な指導法による授業を、時間をかけて丁寧に積み重ねていくことが、重要であると考えられる。

「国語表現Ⅰ」の題材としてほとんど扱われてこなかった古典作品を題材にしたことが、本研究の大きな特徴である。その際、詳細な理解とは言わないまでも、主題を外さずに内容を把握させることが、書く能力を伸ばすためのポイントである。その意味で、より効果的な学習活動をさせるためには、「国語総合」「古典」などにおける読解の授業との連携を視野に入れておくことも重要であると言えよう。

今後は、本来、高校生の段階で求められる論理的思考力を身に付けさせることに、この指導法をどのようにつなげていくかが課題である。古典作品を題材にした「書き換え」学習活動による書く能力を伸ばす授業づくりを、これからも深めていきたい。

引用文献

- 国立教育政策研究所 2007 「平成17年度高等学校教育課程実施状況調査・同質問紙調査集計結果 国語総合」
(http://www.nier.go.jp/kaihatsu/katei_h17_h/h17_h/05001000040007004.pdf (2008.5.30取得))
- 中央教育審議会答申 2008 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」
(http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/news/20080117.pdf (2008.4.8取得))
- 文化審議会答申 2004 「これからの時代に求められる国語力について」
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/bunka/toushin/04020301.htm (2008.4.8取得))
- 神田秀夫・永積安明・安良岡康作 編 1971 『方丈記 徒然草 正法眼蔵随聞記 歎異抄』 小学館 p.164
- 府川源一郎・高木まさき・長編の会 編 2004 『認識力を育てる「書き換え」学習 中学校・高校編』 東洋館出版社 p.129、p.132
- 藤井彦彦 1993 『文章表現力の基礎指導 人間行動としてのことばの教育』 東洋館出版社 p.256
- 安良岡康作 1967 『徒然草全注釈上巻』 角川書店 p.383

参考文献

- 高橋俊三 2008 『声を届ける 音読・朗読・群読の授業』 三省堂